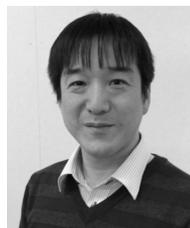


「英語で授業」はこう始めよう

——3年間を見据えた英語科教員のチームづくり

前田 昌寛



春になると立派になった卒業生が巣立ち、初々しい新入生が入学してきます。卒業生と新入生を比べると、3年間の指導の積み重ねがいかに大きいかを実感されるのではないのでしょうか。本稿では「英語科教員チーム」として3年間を見据えた指導をどのように始めたら良いかを考えます。

◆「学習到達目標」を定め共有しよう

3年間を見据えるために、卒業時に求めたい英語力を明確にする必要があります。それを学習到達目標として「～できる」というCAN-DO形式で表します。

<学習到達目標の例>

1学年	2学年	3学年
英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとし、日常的で簡単な情報や考えなどの的確に理解したり…	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとし、社会的で基本的な情報や考えなどの的確に理解したり…	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとし、社会的・学術的な情報や考えなどの的確に理解したり…

1年生は「日常的で簡単な」情報や考えが、そして3年生は就職や進学を意識して「社会的・学術的な」情報や考えを扱います。これはただ単に教科書の内容がそのようなことになるということではなく、教師の発問もそれに応じて、例えば「英語の重要性」を扱ったレッスンでは、1年生にはWhy do you study English? という日常的な質問が、3年生にはWhat role does English play in the world? という教室と社会を結ぶ発問に、同じトピックでも変化するのです。

◆3年間を見据えたレッスンの「流れ」を構築し共有しよう

学習到達目標は生徒の発達段階に合わせて変化しますが、1レッスンの授業構成は3年間をとおして系統的で普遍的な「流れ」を構築できます。例えば、レッスンの初めは全パートをとおして読ませる指導から入り、共有ハンドアウトを用いて各パートの指導を行い、レッスンのまとめには英作文を書かせ、それに基づいてスピーチ活動を行いパフォーマンス評価しましょう、という「流れ」を英語科チームで共有できれば、2年生あるいは3年生から担当したときもスムーズですし、ハンドアウトの共有や進度の統一ができ、指導を「何から始めて何で終わるか」が明確になります。

<(例) 1レッスンの流れ>

配時	指導
1	①レッスン全体のおし読み (予習させない)
	↓
パート数 ×2	②オーラルインタラクション (Presentation)
	③リーディング (Comprehension)
	④有意味な文法・音読練習 (Practice)
	⑤ライティング・スピーキング (Production)
	↓
2	⑥レッスンまとめの英作文・スピーチ活動

<各項目の指導詳細>

① 「概要」を捉えてから「詳細」を読ませる指導です。まず、おし読みをする前に、トピックに関する発問をします（「英語」について学ぶレッスンの例）。Today's story is about English.

There are about two billion people who speak English. などとトップダウン的な説明ではなく、生徒の思考のスイッチをONにさせる大きな発問をしてみます。T: How many languages are there in the world? / S₁: I think there are 100? / S₂: 200? / T: Actually, it is said that there are more than 6,000 languages in the world. / Ss: Really? / T: If you have a chance to talk with Chinese people in Italy, what language would you use? / S₃: I would use English. / T: Why? / S₃: Because English is useful when we communicate with people from other countries. / T: I see. Then, how many people in the world do you think speak English? などとクイズ形式にすると、テレビ番組で「答えはCMのあとで!」と言われたときのような知的欲求を生み出して本文を黙読させることができます。教師がWPMを測って数十秒ごとに板書し、読後は概要を確認する問いを用意すると良いでしょう。

② パートごとの口頭導入で、「概要」から「詳細」に入ります。例えば「日本人と英語学習」など具体的な話に入ったとき、ここでも教師が一方的に説明するのではなく、コミュニケーションをしながら本文と生徒を繋いでいきます。T: How many years have you been studying English? など生徒に関連のある質問から入ると良いでしょう。S: For three years. / T: OK, then, how many years do you think Japanese people have been studying English? By the way, some people say that Japanese have been studying math since Yamato era. How about English? など本文に興味を持たせる発問をします。コミュニケーションのための英語使用ではなく一方的な説明になると、生徒が理解できているのか不安になり不要な日本語が口を突いてしまいます。

③ 文字として書かれたものを英語(口頭)で理解させるためには、「本文に書かれた事実を確認

する問い」「本文に書かれたことに関連した問い」「本文に書かれた事実からさらに隠れた筆者の意図を推論する問い」を組み合わせ、内容理解を図るのが良いでしょう。

④ 本文の内容理解が終わった後での音読です。文字を音声化し、このあとの表現活動につなげる目的があります。

⑤ 各パートすべてで大がかりな表現活動は時間的にもできないと思います。ここでは、レッスンまとめの英作文、スピーチ活動への準備(ネタ作り)を少しずつさせていきます。

⑥ パートごとの指導を通じて得た情報、考えたことをまとめて表現する時間です。制限時間や語数をCAN-DOリストに明記すると評価の基準となります。受信者としてALTを活用するとよりコミュニケーションを意識した活動となります。

◆「学力(英語力)」とは何かを認識し共有しよう

英語による授業で大学入試に対応できるのでしょうか。その答えは「対応できる」です。しかし注意が必要です。コミュニケーション指導と知識注入のための説明型授業との間でぶれるとどちらか中途半端な結果になるのです。本物のコミュニケーション指導をしっかりと行い、「知りたい」「伝えたい」というコミュニケーションへの「関心・意欲・態度」をしっかりと付けさせることで、内容のある言語のやり取りが起き、しっかりと「思考・判断・表現」力の養成ができるのです。これが本当の意味で言語知識の定着と増加に繋がり、試験で知識の有無はもちろんその運用能力を試されてもびくともしない「学力(英語力)」を生徒に付けさせることができるのです。単語帳を嫌々開いて覚えたことを次々と忘れていくより、コミュニケーションという体験をとおして知識の獲得を図っていく方が、本当に付けさせたい真の「学力(英語力)」への道であることを「チーム」で共有するのが重要です。

(まえだ まさひろ・石川県立金沢桜丘高等学校教諭)